



QFN 通信

since2005.6.1

Qshu Forest Network News
NPO 法人 九州森林ネットワーク

巻頭文 理事長 佐藤 宣子(福岡県 福岡市)

新緑の季節を迎え、日に日に暖かくなっていますが、会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。

新型コロナウイルスによるマスク生活も2年を超え、未だ収束しておりませんし、ロシアによるウクライナへの侵略戦争が本年2月に突然始まり、世の中が大変不安定になっています。戦争が突然勃発し、理不尽な状況下におかれている人々の姿に痛ましさを感じます。また、戦争によって、エネルギーや食糧、そして木材も国際情勢によって大きな影響を受けることが炙り出されています。ガソリンや食料品の価格も徐々に上がってきています。北洋材といわれるロシアからの輸入材は、熱帯材の入手が困難になった後に合板の材料として広く用いられてきました。近年ではロシア側の輸出関税が上がり、丸太輸入量は減少していましたが、日本政府はロシアからの木材輸入禁止を発表しました。平時ではあまり大きな問題でないことも、非常時になると国内資源とくに地域内での経済循環の重要性が改めてクローズアップされる、そうした時代を迎えています。

本QFN通信では、昨年12月に大分県日田市で実施した第26回九州森林フォーラムの報告を掲載しています。九州地区自伐型林業連絡会との共催で開催し、小規模林業の可能性と課題について、熱い議論がなされました。フォーラムを通じて新規の会員も迎えることができました。参加して下さった皆さま、有難うございました。

また、本通信では、第10回目となるプレミアム研修の案内も掲載しています。昨年、オンライン研修で勉強した沖縄の森林文化と木造住宅について、実際に見学しようと企画しています。こうした各地域の歴史と知恵を学ぶことは先にのべた地域内循環を高めることに繋がります。講演が大好評だった仲間勇栄先生に集落を台風から守る(抱護)ために形成されたフクギ集落を案内していただくことにしております。

ご参加をよろしくお願いいたします。また参加される場合は、感染対策をしっかりと下さるよう、よろしくお願いいたします。楽しく、ためになる研修になることを期待しています。

新緑がまばゆい季節に・・・。

2022年4月13日 理事長 佐藤宣子

第30号 2022.4.8 発行

発行日 2022.04.08

〈発行〉

NPO 九州森林ネットワーク

本部:熊本県小国町

〈編集責任〉

宮崎県諸塚オフィス



【目次】

第26回九州森林フォーラム in
大分県日田市の報告

【基調講演①】 P2～P5

【基調講演②】 P6～P7

【事例発表】 P7

【パネルディスカッション】

P8～P10

【2日目現地見学会】P11

【アンケート内容等】P11～P13

【第10回プレミアム研修会

案内】 P14～P15



第26回 九州森林フォーラム in 大分県日田市 ～九州における小規模林業の役割と課題～

森林・林業をめぐる大きな変化が生じています。特に米国の木材需要が高まり、コロナ後の郊外への住宅建築ラッシュを見越して金融マネーの投資対象となり住宅、木材価格が上昇したことです。日本にも影響し、「ウッドショック」と報じられたように、一部では住宅着工がストップし、国内の丸太、製品価格も上昇しています。長期にわたって再造林費用も確保できない低価格で推移してきた木材価格の上昇は、山側にとって歓迎すべき状況だと言えます。しかし、グローバル経済の大きな流れに翻弄されずに、しっかりとした地域の実需と結びつく林業や木材産業を確立することの重要性も明らかになったのではないのでしょうか。

以上のような経済や環境が大きく変化する中で、社会基盤である森林を保全しながら、木材の循環利用を進めることが求められています。今回の九州森林フォーラムでは、小規模な担い手に焦点をあて、その役割、可能性、課題を議論しました。九州はかつて自家山林を自家労働力で施業を実施する自伐林家が多い地域として有名でしたが、次世代への継承が難しく、また主伐中心の時代となり、事業体による施業が中心となっています。素材生産の機械化と規模拡大に伴って、大面積な皆伐施業地が増加しています。また、木材加工業の大規模化が進行し、大量・安定的な原料確保が求められています。一方で、近年、九州地区自伐型林業連絡会が発足し、自家山林を再活用したいとする森林所有者や自家山林を保有しない移住者が他者の山林を借りる、または委託を受けて林業を行う、「自伐型林業」の動きも広がっています。自伐型林業の小規模施業方法を取り入れようと、大規模山林所有者と自伐型林業者が協働した研修会も始まっています。九州地域で自伐林家や自伐型林業といった小規模林業はどのような役割と課題があるのでしょうか。定住化、環境保全、減災、地域振興など多角的な視点から、実践者を交えて議論しました。今回のフォーラムでは、九州地区自伐型林業連絡会との共催で、大分県日田市で現地およびオンライン（Youtube 同時配信）のハイブリッド形式で開催致しました。

場 所 大分県日田市「日田市民文化会館」 パトリア日田（ギャラリー）

日 時 令和3年12月10日（金曜日） 13:00～17:00

フォーラム会場参加：58名 ライブ参加：46件 Youtube 視聴回数：158件

【基調講演①要旨】テーマ「小規模林業の歴史と新たな展開」筑波大学生命環境系農学域 興梠克久准教授

・自伐林業の歴史～昔からの農林複合経営は、近年の多業的暮らしの原型。

（自伐林家、自伐型林業とは） 自営林家（自立林家 or 家族経営林業等）：兼業又は専業。

自伐林家：自家労力中心で自家山林の伐出を行う林家。多くの場合、小規模。

自伐型林業：基本的には他人 or 自己山林を、自家労働中心で伐出を行う移住者や定年帰農者等。小規模。

・自伐か自伐型かっていう区分ではなく、広義の自伐というのは自伐林業＋自伐型林業でとらえるべき。

本日の中心的に取り上げるのは集落営林型林業

（自伐の統計的把握） 農林業センサスや統計調査でははっきり出てこないが、家族林家と一人親方を合わせた木材生産量のシェアは約20%で決して無視できない。

（自伐林業の経営～特に、自家労賃について～）

・自伐林家の収入は、利潤＋自家労賃で、通常は経費となる賃金が収入に算定される。木材価格が安くなり利潤がなくても自家労賃部分が収入となり、生産が継続できる。「足腰が強い」という研究者もいるが、実態は切売り労賃になってないか。農業経済学的に、地域の日雇い賃金程度の日当にならなければ経営としては評価できない。

（林家研究の視点と歴史的な自伐研究）

階層別分析：歴史的な林家研究での代表的なのは大規模（雇用）か小規模（家族）に分ける。大規模地主で利潤追求する。小規模の場合、土地持ち労働者や農林複合経営などがある。

地域分析：地域の森林資源の年齢構成や兼業機会の有無といった労働市場の研究。

林家経営論：生産性（土地生産力、労働生産力、機械化）、持続性（経営の持続性、山村定住社会、集落機能）、社会性（環境配慮、公益的機能の維持）の3つの視点で林家を論じる。

- ・最近の自伐林家は、他人の山の管理や集落営林による所有の枠を超えた林業活動をしている。これが社会性として評価できるポイント。
- ・昔は生産性、経営の持続性、農林複合経営論が中心で、社会性に関する研究というのはほぼなかった。
- ・社会性の視点は90年代以降。2000年代以降は、自伐型林業も加わり、社会性の観点の研究が増える。
- ・生産性は、機械化と安全対策、労働災害の重要性が近年ポイントになる。
- ・経営の持続性では、森林経営計画制度の効果は疑問である。
- ・現代の多業的暮らし論の原型あるところの農林複合経営や農山村移住、田園回帰論が盛んになる。
- ・社会性では、森林認証制度を自伐林業でも可能かが一つの論点。その際、いわゆる恒続林を目標にする、あるいは森林モザイクの追求など、いわゆる環境配慮型施業を目指す可能性。
- ・集落営林により、自伐型とか自伐林家が、重要な人物として地域の誇りを持つ目線の活動につながる。
- ・戦後の中小農家林家研究には大きな波が3回あった。

-①50年～70年代。中小農家林家が拡大造林の担い手として評価され、その後、造林に育林（下刈り、枝打ち）過程と椎茸、茶、牛等による複合経営。森林組合等による雇用労働力の供給源として重要視。

②戦後造林木が間伐期に入り、森林組合による小径木加工工場整備や原木市場への進出等を背景に、林内作業車も開発され、自伐がこの頃生まれた。

③90年代後半以降、自伐林家がグループ活動として機械の共同利用や集落営林を始めるなど、自伐林家の組織化、自伐林業の組織化が進む。木の駅プロジェクトやNPO法人自伐協等の自伐型林業者を広く育てる仕組みができ、自伐型林業従事者が増える。

（自伐林業の世代論）

- ・世代論が重要。現役世代と子供の世代だと自伐林業は農林複合経営が基本パターン。田園回帰では、若者が移住し、多業で暮らす。また定年でUターンし自営農林業を始める定年帰農も一定数いる。木の駅プロジェクトの参加が大きな契機となる例。高齢世代の林家の後継者が悩ましい問題で、今後の課題になる。
- ・自伐、自伐型林業の取り組みの形態が世代で違う。第1世代（戦前生まれ）：農林複合経営
第2世代（50～60代）：自伐林家のグループ活動と機械の共同利用とか集落営林
第3世代（田園回帰等で活動する30代、20代）：自伐型林業
世代継承というのが、一世代飛び越えて、祖父母から孫への継承が林業でもある。

（低コスト林業との関係）

- ・必ずしも低コスト林業＝高性能林業機械化とはならない。大型機械は効率が良いが稼働率が低いと高コストになる。小型機械は安いので、稼働率はコストには大きく影響しないが、稼働率を上げてても生産量では大型機械にはかなわない。

（自伐林業の施業の特徴）

- ・自伐林業の特徴を林学的な視点での特徴①長伐期施業。藤森隆郎氏の森林発達段階論（林分成立段階と若齢、成熟、老齢段階の区分けができるが、水土保持上望ましい森林は、この段階を経由する長伐期が好ましい）。大型林業は林分成立段階と若齢段階の約50年で回すため、環境に適正な森にならない。
- ②小面積分散施業。森林モザイク論（木平勇吉氏1994年。带状・群状択伐、小面積の皆伐を分散して伐採する形態）で、皆伐よりはこの多様性持続性はある。生産性、伐出生産性でも単木、択伐よりも有利。
- ・全体としてこの長伐期の単木、択伐を恒続林とすると、理想は恒続林、単木、択伐長伐期。次善の策としての森林モザイクの追求がある。

（農林複合経営の意味）

- ・農林複合経営は、多業的暮らし論の原型。農林複合経営論は1970～80年頃に農業経済学界で議論。

- ・農林複合経営論：林業部門は、将来の臨時出費への備えの性格を持ち、農業や兼業からの連年収入を長期間にわたって補完するもので、生活基盤であり労働力の再生産構造上不可欠なもの。生存権の保障であり、土地を投資対象とする商品所有とは全く違う概念。
 - ・経済の発展課程で、一旦農業系が専門化とか単一化の方向で極めようとするが、やはりこの複合経営の形態にいずれ戻るだろう。その時に、大経営による複合経営は形成されるだろうし、小規模な農家も共同協力関係で結ばれた小農による近代的複合経営となりえる。
 - ・兼業農家林家、小規模農家林家は、生産性の観点で不経済的でスケール面が発揮できないという見解がある。山村の小規模農家林家の存在は、生産性だけではなくて、山村の生活者、地域社会の重要な構成員である認識が大事。たとえば集落による作業道の維持管理では小規模な農家林家も役割を果たしている。
 - ・地域経済の観点で農産物の地場消費の市場でも、消費者および生産者として大きな役割を果たす。
- (集落営林の可能性～ワーカーズコレクティブ～)** 集落営林の自伐林家グループの静岡県での調査の結果
- ・自伐林家グループによる集落営林は、山村の共益、公益を目指すワーカーズコレクティブ、労働者協同組合的な組織として今後の可能性が期待できる。自治体や企業ではできないが、住民に必要なサービスを住民協働（自伐林家グループによる集落営林）で担うことになる。
 - ・ワーカーズコレクティブ：労働者や市民が出資し、経営に参画し、民主的に事業を運営し、責任を分かち合い、地域に役立つ仕事を自分たちで作る共同労働という新しい働き方。
 - ・木材販売で利益追求を目指す、生活支援や地域貢献を实践する共益公益の実現も重視。耕作放棄地の管理とかあるいは空き家対策とか空き家賃貸の運営とかもやるようになっている事例もある。
 - ・労働者協同組合は、来年から施行される法人化を規定した法律が施行される。
- (静岡県の自伐林家グループへの注目)**
- ・約 20 年前から、静岡の自伐林家グループの研究で調査に数年おきに実施している。
 - ・90 年代以降に自伐林家グループの設立が活発になる。林業とお茶の複合経営。作物は違うが、九州、四国とは形態が似ている。
 - ・80 年代までは静岡の林家は立木販売が主流であったが、静岡は労賃が高い地域（伐出労賃、全国平均 13,000 円、静岡 17,000 円）であり、経営コストを節約のために雇用ではなくて自伐を選択する林家が 90 年代から多く見られ、一挙に自伐に転換する非常に面白い地域である。
 - ・聞き取り調査例①静岡市林研森林認証部会～自伐林家 6 人が複数の集落から集り、共同で SGEC 認証取得。30, 40, 50 代が中心で比較的大きめの中規模林家が多い。複合経営。森林経営計画共同。構成員の鈴木林業は、所有は 380ha で、集落の個人林扱って、約 1000ha の集落営林を実施。
 - ②文沢蒼林舎（川根本町）～6 戸のうち、高齢者世帯以外の 3 戸の自伐林家で 6 戸全体の森林約 400ha を共同作業で管理する。最初ウッドクラフト中川根として機械共同利用組織として出発。その後、町有林を加えて FSC 認証を取得。中心人物が、出身集落の文沢地区に戻り、自伐林家グループをつくった。
 - ・2つの事例では、生産性では、機械の共同利用、森林経営計画を実施。まだ保育間伐が中心だが、搬出間伐もこれから増えてくる予定。持続性では、お茶と林業の複合経営で、40 代～50 代の第 2 世代の自伐林家。社会性では、森林認証を取得し、所有の枠を超えた活動に取り組んでいる。
 - ・社会的には、集落の自伐林家が減り、集落の枠を超えた人の結合により組織化（機能結合 or 集落外社会結合）。この機能集団で学んで、元の集落民と結合して集落営林をするなど集落再結合が見られる。
 - ・集落営林で自伐林家の存在は、ネットワークの発信力とか、農林地保全のための様々な活動、地域のアイデンティティの確立、文化も含めて重要な役割を果たしている。
 - ・事例③静岡の自伐林家グループ（約 30）アンケート
- 静岡県の支援の効果：県単事業で、機械の導入支援、搬出の補助。生産ではなくて生活関連予算。
- 93 年から毎年数件のグループが、今も設立され続けている。最初の頃は機械の共同利用が目的。徐々に

間伐の搬出補助のグループ化が増え、生産を目的に設立する流れに変わり、集落営林活動に繋がる。

自伐林家の分類：機能集団として、複数の集落から集落を越えて結束と集落の結束の2つがある。多くは自伐林家が牽引するグループだが、自伐林家ではない方が集落営林を担っている例もある。第2世代から第3世代の普通の世代継承のグループでも、自伐林家に育てられた、林家でない地域住民が、後を継いだ例もある。任意団体が多いが、信用度や個人に頼った組織運営は持続性がないので、法人化で経営の担い手の再生産が必要だが、静岡でも法人化は検討段階。ワーカーズコレクティブの展望。

(自伐林家グループの事例)

- ・自伐林家事例①H20 林業グループ：機械（小型のグラブプル、ハーベスタ）の共同利用組織。5人。利用料金を貯めて修繕費に充てる。
- ・②五葉林業：自伐林家3人。製茶組合が基盤。自分の集落と隣の集落もあわせた集落営林。
- ・③森づくりS川根・NPO：笠間地区のNPO法人で集落営林。最初は自伐林家が主催。その後、森林組合、製材、建設業、大工等が共同作業を実施。空き家対策、荒廃農地対策、外国人の陶芸家の国際陶芸イベントなど、集落営林に留まらない集落の公益、共益事業を担う。笠間地区出身者の寄付（2億円）を元手に林業機械を購入し、集落営林を始める。地域住民が総出で参加。
- ・グループ化は、集落を超えて形成されても、経営体への発展でなく、経験者が集落に戻り、集落営林を始めていることに注目。静岡で盛んなのは、県の補助と活発な林研活動、リーダー的な人の存在がある。
- ・森林組合系統と自伐林家グループが、敵対せずに上手に棲み分けしている感じを強く受ける。

(自伐の全国展開)

- ・自伐林家の研究は、大規模、小規模化、あるいは椎茸とかの地域性で分析することが多い。これまで自伐林家は西日本で非常に多く、東日本は少ないといわれていた。岩手大学船越名誉教授は90年代始めに「東北の林家は、いずれ戦後造林が成長すれば、九州のように自伐の時代になる」と予言されていた。残念ながら、東北林業というのはその後、林業事業体中心の産地になり、皆伐が増えている。
- ・多業的暮らし：原点に農林複合経営があり、九州の椎茸、東海のお茶という強みが自伐が盛んな要因。
- ・最近の半農半X、半林半Xの半Xには観光とか福祉とか農業とか色々あり、地域差はあまり関係ない。
- ・木の駅プロジェクトや自伐協、土佐の森等の運動組織の活動による普及や啓発は、昔の自伐林家論にはなかった。運動組織の重要性を改めて思う。これらの運動主体の普及啓発は、全国展開をされている。
- ・自伐と言っても、生産力は改めて重要。昔は、自伐林家の研究は、生産性から評価できず、地域政策や社会政策の対象とする研究者がいた。産業政策、資源政策として自伐林業を捉えることは重要である。
- ・たとえば、産業政策では、機械化と効率、安全という観点、資源政策では、災害、気象災害、土砂災害という観点と恒続林を目標にすると、次善の策としてモザイク森林を追求する技能とかになる。



・基調講演①風景（興梠克久先生）



・基調講演①会場風景

□【基調講演②】テーマ「東北での自伐型林業の展開と特徴」

（一社）東北・広域森林マネジメント機構 代表理事 三木真冴氏

(自伐型林業の特徴)

- ・自伐型林業は、地域主体の持続的森林経営手法の一つで、森林所有者や地域の住民が地域の森林資源に価値を生み出して自ら管理、施業する自営林業で、小規模分散型である。
- ・皆伐でなく、2割以下の間伐を繰り返し、生産をしながら山の材積を増やし、持続的に森林を継続する。
- ・また低コストで、消費コストが低いいため、参入が容易で、幅の狭い大橋式作業道を山に高密に敷設し、山の負担を減らし、小規模な機械での林業を実現している。チェーンソーと軽トラから林業を始められ、副業、家族経営、移住者の生業、様々なスタイルの林業が可能となる。
- ・最近採算性を優先し、機械も大型化し、短期間で大規模な皆伐をする現場が増えている。土砂流出や河川や住まい、漁業にも影響が出ている。自伐型林業による適正な森林の手入れで、災害を予防し、リスクを減らし一次産業、観光業への良い影響を与えることができる。

(東北広域森林マネジメント機構の活動) 2016年11月に設立した東北の自伐型林業組織。

- ・東日本大震災の際に、被災者の生業の再生、仕事づくりの支援の一環で、土佐の森、自伐型林業推進協会が被災地に入ったのを契機に、自伐型林業が広がっていきました。
- ・自伐型林業関係者が集まり、地元の推進組織として発足。自伐型林業の啓発事業、フォーラム等を実施。
- ・自伐型林業の研修と希望者のサポートとして山の調査や補助金紹介、グループ化、講師の派遣等を実施。また自治体、県、所有者、地域、企業と連携。最近バイオマスボイラー導入調査事業なども実施。
- ・機構として山林の委託管理を受けて森林整備を実施。また、地域住民を集め、公民館での自伐型林業の勉強会、チェーンソー研修会や集材、土場運搬・販売、作業道研修、グループ化計画のサポートも実施。

(東北の林業の課題と自伐型林業の広がり)

- ・林業従事者の減少、高齢化。皆伐面積が増加し、再造林放棄地が非常に増えている。
- ・震災後に地域を離れざるを得ず、山林所有者が地域にいない不在地主も増える。
- ・放射能の影響で山菜や、きのこ、椎茸の原木等の出荷制限で、豊富な山林資源が使えない状況にある。
- ・岩手県では、マツや広葉樹が、最近病害虫の影響で枯れたり、鹿の被害も非常に多い。
- ・再造林、天然更新がシカの被害によって阻害され、伐採後は裸地のままの山林も増える。
- ・課題は多いが、所有者による持続的な森林の維持管理が難しくなり、地域で森林管理の担い手が必要。
- ・近年、自伐型林業が広がる原因は、東日本大震災後の地域での薪の自給やバイオマス発電等の需要や、残された山での仕事づくりなどがある。被災地に多く集まった移住者の副業、仕事の一環でも広がる。
- ・2016年と2019年の台風被害は、林業が原因という認識から、災害に強い林業の展開につながる。
- ・新型コロナウイルスによる失業や収入減、ライフスタイルの変化で、自伐型林業への希望者が増えた。休眠預金を財源として東北林業塾を開催。従事者は、移住した若者や地域おこし協力隊が多い。
- ・定年退職者後の50～60代の退職者が副業として自伐型林業を始めるケースも多い。
- ・自営や兼業型がほとんど、森林山村多面的機能発揮対策交付金を活用し、間伐、作業道の補助、機械の購入を行う。森林ボランティアと林業事業体の中間くらいの規模感が主流。年間で3～5haを2人～3人のグループで、中古機械を購入したり、数百万の補助金で一般材やバイオマス材の合板用材を生産。
- ・最近森林環境譲与税事業で作業道や間伐補助、搬出補助を受けるグループも出てくる。
- ・全国的には企業化する例もあるが、中規模グループを多く作って地域に分散させる方が持続的になる。
- ・自伐型林業とはボランティアグループから、ステップアップの相談もあり、今後も増える予想。

(東北の自伐型林業グループの紹介)

- ・事例紹介①九戸山族：広葉樹の間伐施業を補助金0円で実施。東北の広葉樹施業はパルプ、チップ生産の林業で、間伐はないが、択伐をして炭や椎茸の原木、薪などを生産。炭やほだ木は手で持てるサイズで販売できるので、軽トラとチェーンソーだけで施業できる。残る広葉樹も将来市場に出せる。
- ・事例紹介②宮城県南三陸町・波伝の森山学校：自伐型林業とツーリズムや地域資源販売。地元材の家づくりとして、校倉工法の家づくり。東京の企業向け南三陸スギの内装材販売。

- ・事例紹介③東北・広域森林マネジメント機構：企業林（岩手県一戸町 440ha）の森林整備。地域で山を管理する山守の育成を目標。地元で研修会を開催し、人材を育成したり、町に地域おこし協力隊を提案して、その場所をフィールドとして活用する。全体が広葉樹で炭焼きや椎茸、薪作り、製材所と連携した家具材製材などのフィールドになる。企業の利用や社員の利用も検討中。

（自伐型林業者の特徴～生活者として行う林業～）

- ・職業や就職として林業を捉えず、副業として、生活として林業を営んでいる。売上追求よりも、丁寧な山作り、地域を良くする発想を持つ。新規参入者のサポートや SNS など積極的に情報発信をしている。
- ・所有者や地域も、自伐林家に金銭より、地域が良くなることに重きを置き、新規参入者の為に、森林の集約をする事例もある。移住政策や福祉的な評価もできる。

（東北における自伐型林業の課題と解決策・展望）

- ・自伐林家の活動実績がないため、補助事業は大規模事業体向けにデザインされている実情。
CF. 作業道幅員、間伐率制限、広葉樹の間伐補助金はなし、小型林業機械の補助金なし
- ・山林所有者の多くが 1ha 前後の小規模。担い手の不在。
- ・生産した木材販路も、合板や発電用のチップ材は、零細の自伐型林家は、直接発電会社等に売れず、森林組合等の割当て手数料を払って納めるのが実情。地産地消のための薪ボイラーを入れる。
- ・森林環境譲与税を財源に自伐型林業の支援を予算化するなど、自治体との連携を重視。
移住定住対策や災害に強い山作り、森林管理の担い手等を題材にフォーラムや体験研修を開催。
市町村有林を研修や施業林として利用。地域おこし協力隊や林政アドバイザー制度の導入。
- ・自伐型林業の展開～①気候変動の影響下での災害に強い山づくり。皆伐でなく小規模分散型の山守を地域に増やして地域の山林を守っていく②研修の指導者を育成するため、経験者向けの講師育成事業を予定③事業者と伴走支援サポートできる中間支援組織を地域に立ち上げる④地域自治体との連携の促進



基調講演②風景（三木真冴先生）

【事例発表】



下毛の里自伐型林業研究会・福田裕一事務局長

マルマタ林業㈱・合原万貴氏

㈱まるごと農場・吉井和久氏

【パネルディスカッション】コーディネーターからの問題提起

- ・豪雨災害が激甚化で、災害に強い森作りの有効な手段の一つとして自伐施業がある。
- ・地域に若者が住み、多彩な人が自伐型林業に参入し、新しい山村価値の創造を期待する。

・産業政策や資源政策のために、自伐を問い直す必要がある。

＜自伐型林業、あるいは自伐林家といった小規模林業の役割とはなにか＞

福田：今でも、田舎に住まず、都会で働いたほうが良いという価値観というか、信仰みたいなものがある。

もうそういう考えをやめ内側から変えていく時期にきた。その時に、じゃあ仕事はとなる。

自伐林業は儲けは難しいが、それなりの生活と楽しいことができるので、可能性はいっぱいある。

合原：日田林業は、津江の山々で支えられているが、地域の人口減少が著しい。何か新しい風、少しでも何かしらを起こしていかないと何も変わらない。自伐での生活は、集落営林のシステムとか、日田市の林業将来に、それも含めて入れていくべきと感じている。そのなかで、選択肢として、小規模施業とか、大規模とかを選んでいく。

吉井：林業は多面的機能発揮するべきなのに、皆伐施業で災害を誘発している。林業事業体が壊して、建設業が復旧している。自伐型林業は、現状へのアンチテーゼである。大規模か、小規模化がなく、本来の林業施業のあり方を見直すべきときで、だからこそ自伐型林業が今注目されている。

三木：中山間地域の人口減少のなかで、IT 業界や海外からの帰国者、飲食、観光など、多様なバックグラウンドを持った自伐型林業の希望者が増えている。この状況で、林業の課題は林業関係者だけでは解決できなくなっている。外部の協力で初めて突破できるような事って結構あると思う。自伐型林業の広がりはとても大きいチャンスで、中山間地域で人が暮らせる状況を作ることが大切だ。

＜新規参入者のための地元民による山を確保方法は？＞

三木：東北は共有林とか集落林が多い。理事が、山林を集約したり、他の理事を説得してマッチングする例がある。自伐ではなくてあくまで山の手入れで、売上は施業者という契約をしているケースが多い。

興梠：小規模林家が適正だという理由として①所有が零細分散であり、資本主義経済の発展のネックとか、短伐期で回そうという発想ではなく、小規模分散型を逆手に取って、森林モザイクや長伐期、多間伐施業で環境配慮型施業につながる②自伐林業は、家族経営サイズであり、その強さというか持続性と、世界的な家族経営の再評価の視点を持つべき。小規模なサイズの高性能で安価な林業機械は開発できている。ただ、自家労賃を切売りする労賃水準でビジネス貸している現状は、経営学的に見直すべき。③この世界は、生活者の視点が非常に重要。自治体や事業体ができない地域の公益共益を、協同労働でしっかり担っていく新しい働き方が、集落営林の形で現れてきている。

＜自伐型林業での機械購入の補助金は？どこから？＞

三木：私は3t車作業道整備のミニバックホウは林野庁の1/2補助。丸太搬出運搬の林内作業車も所有するが中古なので自己資金。別に作業道整備には、基盤整備の補助を受給している。

福田：林野庁の交付金と大分県の森林環境税、中津市森林環境譲与税の補助金がある。機械の補助はあるが、予算の総額が足りないといわれる。林内作業車、運搬車やチェーンソーとかはあるが、条件が厳しい。

＜自伐型には機械代が一番のネックで、補助金が必要。静岡の補助金の情報を詳しく＞

興梠：県のほか、静岡と浜松市が独自で機械補助している。グループで5台とか10台とかまとめると値引きがあるなど、いろいろな組み合わせも可能である。

吉井：熊本県は、林業研究グループに対して県補助があり、林内作業車50%、バックホウも50%だった。

＜自伐型林業者、山守と所有者さんとの施業契約の形態を詳しく知りたい＞

三木：事例はあるが、決まりがある訳ではなく、ケースバイケース。契約期間は、補助金利用の場合、施業計画を交わすと、それが契約に変わるケースもある。分収林施業の売上の割合や売上の何%を返すか、ha単価、経費の扱いなど様々。ただ、ずっと放置していた山を最初に道を入れて間伐するときというのは、すぐには収益に繋がらないことの所有者への理解が必要。

興梠：静岡の自伐林家グループの3つのうち2つは、集落営林で森林経営計画を立て、15年の間伐で森林活用している。そこで森林組合に対ししっかりと棲み分けがなされている。契約までは聞いていない。

会場：宮崎県で2件の山主と山守契約してまだ数年であるが、儲からず、少ししか山主に返せていない。

コーディネーターからの問題提起②

- ・切売り労賃の問題＝（経費から外されて見えなくなっている）労賃部分をどう設定するか。
- ・暮らしを志向する移住者は、年収は暮らせる程度。子育ては高い収入を目指すなどバラエティに富む。

<移住者を中心に自伐型林業の年収はどのあたりを考えるべきか>

吉井：私の周りの移住者で、自伐で自立できている人はいない。水俣市には、農業や林業を希望する移住者は多いが、農業を始めた若者のひとりが去年から勤め出始めた。林業でも、結局組合員を頼って植付けや下刈をやっている。年収目標というより、その前の段階で、森林所有者の意欲もなく、施業の対象林が見つけられない。仕事につながるマッチングが一番の課題。

福田：移住者、Uターンに限らず共通の課題。地元の子供は帰ってこいといえど帰ってくる。ただ、子どもが大きくなりお金が必要になった時、地域外の学校に行く時、家族一緒に日田市に移り住むことがよく起こる。林業だけでなく、行政として成り行き任せじゃない太い計画を立てて、教育にお金を使うべき。そのひとつは、日田は雨が多く作業道が崩壊しやすく、復旧の経費が相当かかる。森林環境譲与税で、田舎に住むのを条件に壊れない道づくりの就業者対策で、かなり長期的な仕事ができる。

2つ目は、林野庁の補助金は森林経営計画が必要だが、個人が立てるのは難しい。管理できない山林は、大規模な林業経営者と一緒に属人で計画に入れて、若手が補助金で作業道の修復とかで仕事をつなげて、将来は、間伐も出るようにならないか。

三木：（就業日数を考慮しないと）年収だと解り難いため、日当いくらかという話をすると12,000～15,000円という話になる。それと、希望年収の何割を自伐型林業で稼ぎたいを併せて考える。地域の木材価格を考慮して、年間作業日数と必要な山林面積が解ってくる。山のポテンシャルや補助金のことで変わるが、特殊伐採とか椎茸などいくつかの副業の希望者が多く、自伐型林業で5割の考えが多い。

その過程で、搬出を何m3だすとか、椎茸ホタ木を何本という目標が経ち、達成できない場合、補助金で補うとか、業務の改善や集材、造材の仕方を変えるなど、経営の改善の余地が見えてくる。日当で自分の、ノルマじゃないですけども経営状況をチェックする取り組みをしている。

合原：私も間伐や施業を依頼したいので、そのために一緒にできることのマッチングができるといい。（最初は）任せて大丈夫かという不安はあるが、時間とお互いのコミュニケーションで、地主の意図やスキルもわかってくる。四角四面に金額だけで決めず、折り合いはつけられると思う。

<三木氏は不足分の仲介や目標設定などの経営指導をするのか>

三木：これまではあまりやっていない。技術的な研修だけでは経営できるようにはならない。きちんと数字を見る研修も取り入れ始めた。

興梠：集団で取り組む集落営林の場合でも、これからの時代、労働の対価を受け取るルールを協同組織の原則にするべき。自己犠牲とか公のためにでは続かない。地域のために働いている方は、ちゃんと対価を受け取ってほしい。当たり前のルールになってこそ、新しい働き方かなと思う。

<自伐型林業の受け皿づくりをどうするか。森林組合と自伐型林業家との連携の理想形は？>

吉井：課題は多くある。水俣市の場合は移住者結構多く、個人的に関わりもしたが、行政が動かないと難しい。森林組合には仕事があるので植林などで利用すればいいのだが難しい。何とかしたい思いはあるが、答えが出ない。

合原：森林組合は地域の林業を担う最前線なので、協働できることは多い。自伐林業家は、スキルの差があり、それを誰が責任を持って面倒を見るか。今回一緒に取組んだ福田さんのフットワークはすごい。こういう方が間にいるのがとても重要だと感じた。作業道の補助金は厳しいので、木組みをするならいくら上乗せとかあるといい。

福田：森林組合だと確かに仕事はもらえるが、出稼ぎ、点在していて、山への愛着や、山へずっと関わろう

とならず、仕事が終わると次へ次へと。みどりの雇用での森林組合の従事者は長続きしない。その理由を考えるべき。現在、長伐期多間伐施業を目指す大規模山林所有者や、奈良の谷林業さん（1,500ha）とも、意見交換会をしている。分担は今後の課題だが、山守制度で人を山に固定し、その山に愛着を持つとか、山主さんとの信頼関係をつくるのが一番良い。作業道の修復も結構仕事があると思う。こそに行政も注目して、生活可能な補助金などの配慮をお願いしたい。

三木：地域での自伐型林業の定着には、受け皿となる中間支援組織が絶対必要。例えば地域おこし協力隊として林業の担い手を募集する自治体も増えているが、行政の人には指導が難しい。協力隊や移住者に対し、地域で一緒に相談役や機械を貸出すなど、スタートアップを助ける組織になる。広域でなく、各自治体にひとつあるべき。森林組合との連携だが、森林組合は自伐型林業の敵ではなく、お互いに山林や所有者のために仕事している。広域合併で人材不足と人手不足で手が回らないし、全所有者が組合員ではないので連携はできることはたくさんある。

興梠：自伐型林業業者が新規参入するルートとして、①地域おこし協力隊②自伐協や中間支援組織、独自の研修体系、林業就業支援などの研修が充実し、確立している。課題は山林バンクとかの仕掛けが定着すれば良い。もう一つ、林業事業体に雇用者で将来の自伐型林業者や一人親方、個人請負の希望者は多いが、門戸が狭い。林業事業体や森林組合の従事者は、緑の雇用制度（20年近く続く制度で毎年40～50億円の予算で2千数百人の研修生あり）で、現在の林業雇用労働者の半分以上を育成している。ただ一定規模以上の林業事業体限定の制度なので、零細な林業事業体や自伐型林業者が利用できない欠点がある。対策として森林組合が新規参入の期間だけは研修生として緑の雇用で研修技術を磨き、その後独立するか、そのまま雇用労働者として続けていくなど、小規模林業事業者が緑の雇用を活用できる方法を提案しているが、実現していない。

<コーディネーターまとめ>

- ・自伐型林業あるいは自伐林家の施業がないと、大規模施業しか選択肢がなくなってしまう。その意味で小規模施業を残すべきと私は強く思う。
- ・技術継承や多様な民業で多様な森林のためにも担い手も多様であるべき。環境保全型林業に対する割増助成は、農業では多面的機能交付金ということで、単価設定もされていることもあり、直接支払的なものの仕組みが課題と思う。
- ・移住や自伐型林業希望者は確実に増えているが、契約や山の斡旋などを支援する組織がありませんので、それを担う中間支援組織がすごく大事と感じた。
- ・それから自伐型林家もグループ化や集落で取り組むとかの仲間づくりが課題になると改めて感じた。



【2日目 12/11（土）】現地見学会 参加40名

①マルマタ林業社有林（日田市前津江・大山町）

現地説明：堅山健太郎氏（下毛の里自伐型林業研究会）高山隼人氏・清水未希子氏（九州林業塾塾生）

②田来原美しい森づくり公園（大山町西大山）

現地説明：合原万貴氏（マルマタ林）



【12/10 講演会アンケート】①会場参加者感想

- ・自伐林業の現状が少し判りました。広葉樹の自伐があるのを初めて知りました。（その他 60 歳以上）
- ・このフォーラムに初めて参加し、同郷の方々が同席していた。来年も参加をしたい（林家 60 歳以上）
- ・山を愛する皆様の発表、とても感動しました。持続可能な山づくり、顔が見える関係など設計士の私が、これから考えて実践していきたい内容で大変勉強になりました。ありがとうございました。（設計）
- ・行政、地域、山主との連携が重要な課題だと思いました。（その他 40 歳代）
- ・森林を作るには、色々な考え方があるなと思いました、色々考えさせられました。昔の山村の生活、営みに戻る事が、自伐型林業の考え方に近いように感じました。ぜひ豊かな森林を後世に残すべく、皆さんにご活躍いただき、都市部の方にも森林に目を向けてもらいたいと思います。（行政 40 歳代）
- ・林業の担い手不足・人口減少のなか、中山間地域では、地域の山守さんの手によって未整備の山林に手が入るようになれば、未整備森林の減少につながる。環境に配慮することと同時に代々引き継がれてきた基調な森林資源をいかに活用し、次世代へと残していくことが重要。（行政 30 歳代）
- ・三木さんの話の中で行政との課題がありましたが、私達の市も中々理解を得られません、自伐がもっと広がって欲しい（役所の方ももっと学んで欲しいと思う）。講師のスキルアップとても良い取り組みだと思います。今日のフォーラムに参加してとても良かったです。（その他 50 歳代）
- ・三木さんの話が非常に分かりやすかった。ただ研修を受講して林業の面白さを分かっても、経営的な視点がないと続かない、どのくらい働いて、いくら稼いで、いくら山主に返して、林業以外の X の部分をどのくらいやりたいのかを考える力を U I ターン者が備える事が重要だと再確認できた。（行政 30 歳代）
- ・自伐林業実践に向け、日当から考える必要な山の広さ想定など良い学びになりました。（木材業 30 歳代）
- ・大変勉強になりました、とても刺激的なフォーラムでした。（学校関係 60 歳以上）
- ・他地域の自伐グループのことや、自伐について書かれた論文があることが知れてとても参考になりました。広葉樹施業にとっても興味を持ちました。（林家・木材業 30 歳代）
- ・高校で森林経営を教えています。今後どのように伝えていくべきか解ってきました。（学校関係 40 歳代）
- ・大変勉強になりました。ありがとうございました。（学校関係 40 歳代）
- ・自伐林業の学問的な話と、事例紹介の割合が丁度良かった。事例紹介も様々な事業の紹介を聞けて丁度良かったです。三木さんと吉井さんのお話が興味深かった。パネルディスカッションでは、パネリストの

方々の現場で感じる本音が聞けて良かったです。(学校関係 20 歳代)

- ・中小規模森林の維持の大変さが良く分かりました。今の森林行政では、自伐で頑張ってる所は個人の犠牲の元に成り立って今後森林の維持がどうなっていくのか不安を覚えました。(設計 60 歳以上)

—②オンライン参加者感想

- ・興味深い話で良かった。それぞれ発表者の思いが伝わってきた。限られた時間内での討論もっと聞きたかった。(その他 50 歳代)
- ・大変参考になりました。(林家・木材業 50 歳代)
- ・自伐林業の議論を整理することができて参考になりました。東北の事例も知ることができて参考になりました(学校関係 30 歳代)
- ・自伐林家について、自身の中で学術的な視点から整理、位置づけることができた。分析の視点のなかで、生産性だけでなく、社会性、持続性を考慮した施業について、今後実践していきたいとあらためて感じた。他地域における取り組みを知ること、自身の活動にインスパイアされる内容だった。様々なステークホルダーと協働できる体制を整備していきたい。(林家・木材業 30 歳代)
- ・これまでの林業の経緯や課題は判りました。小規模林業を前提にすると東北の三木さんと水俣の吉井さんのお話は参考になりました。吉井さんの持続可能な森林を作ることが収入につながると良いと思いますがどのように木が使われて対価をいただけるのかイメージがまだ掴めない状況です。自立するには自治体だよりではいけないとは思いますが、吉井さんの自治体が力を入れないと難しいというのが九州の実態かと感じました。(その他 50 歳代)
- ・知らなかったことを知る機会となり、とても参考になりました。授業で学ぶこととは違うことで新鮮な気持ちで聴けました。実際の例を見ることで、具体的に学ぶことができた。(大学生 20 歳代)
- ・自家労賃という考え方を初めて知りました。そのほかにも、いくつか Key words をもらえたので有益でした。恒続林思想をきちんと考えてみたいと思います。(行政 50 歳代)
- ・我々の地域について考えるきっかけになりました。大変参考になりました。(林家・木材業 60 歳以上)
- ・興梠先生から、自伐林業、自伐型林業などについて総括的なお話をしていただけたのが良かった。率直な話しぶりの方が多く、本音を聞かせてもらったと感じた。大変勉強になりました。時間が足りないくらいでしたが、内容は良かったです。(学校関係 40 歳代)
- ・興梠先生のご発表を特に興味深く拝聴しました。先生は九州出身でご実家は林業家と伺っていましたので、研究者としての視点のみならず林家としての知見も兼ね備え、発表には説得力がありました。また学生(梶本さんら)の研究をさらに深めて考察されており、豊富な知識があらたな理論構築(次のご著書)につながるのではないかと感じました。
- ・九州の事例を拝聴しました。今回の地元である、日田の森林・林業について、さらに知りたいと思いました。佐藤先生が「むちゃぶり」されても、みなさんはお話されたいことが多くあり、コメントはどの方もすばらしかったです。こういう深い話が、もっと市民に伝わり、たとえば地域のコミュニティ施設(地元の人たちが集まる公民館や図書館、わたしのようなよそ者が最初に足を運ぶ観光案内所など)から発信され、また情報を取りに行く者が資料収集できるように整理されてはどうかと考えました。情報インフラの構築を期待します。(学校関係 50 歳代)
- ・参考になりました。ありがとうございました。(その他 20 歳代)

③今後取りあげて欲しいテーマ

- ・自伐林家と山主の実績報告会等(その他 40 歳代)
- ・木育、木材利用、木造建築(行政 60 歳以上)
- ・女性の参画、自立するために儲かる林業(行政 40 歳代)
- ・担い手確保・女性作業員の活躍(行政 30 歳代)
- ・山主との契約パターン、施業内容別の売上、月収、半 X との組み合わせ例比較(行政 30 歳代)
- ・小規模林業の話題全般(木材業 30 歳代)
- ・九州での広葉樹施業について(林家・木材業 30 歳代)

- ・ 今後の植林について（広葉樹林への回帰など）（林家 30 歳代）
- ・ 今回自伐型林業の課題は「成立」だと思いますが、「後継」「持続性」の課題に期待。（学校関係 20 歳代）
- ・ 森林サービス産業（森林セラピー、自然保育、グリーンツーリズム）（学校関係 20 歳代）
- ・ 林福連携、ワーカーズ法に関連する働き方（林家・木材業 30 歳代）
- ・ 自治体/森林組合の連携事例、補助金、山主、初期投資、販売の課題と九州の解決事例（その他 50 歳代）
- ・ 日田の森林・林業の歴史と現在、および未来について（学校関係 50 歳代）

第10回 NPO 法人九州森林ネットワーク会員向けプレミアム研修 in 沖縄

「沖縄の森の歴史と木造住宅」

九州森林ネットワークでは、過去8回に渡ってプレミアム研修を九州各地で行ってきました。

この研修会を通して地域、業種を超えて会員各位の交流を図り、それぞれが抱える問題・課題など様々な意見交換を行ってきましたが、昨年は新型コロナの影響によりオンライン（Zoom）での研修を行いました。

今回は沖縄での研修会を以下のとおり開催致します。昨年講師をお願いしました、琉球大学名誉教授 仲間勇栄先生に解説ご案内頂きながら、皆さんとの交流を深めていきたいと思っておりますので、ご参加よろしくお願い致します。



開催日 令和4年5月20日（金）～22日（日） 2泊3日

解説・案内 琉球大学名誉教授 仲間勇栄先生

集合場所 沖縄那覇空港（昼食後に集合予定）

* 集合場所、時間は後日連絡します。

主な日程

5月20日（金曜日）	昼食後 指定場所に集合 ・備瀬の集落散策（仲間先生の解説・案内） https://www.tabirai.net/sightseeing/tatsujin/0000363.aspx ・ホテル到着後、懇親会（宿泊先近辺予定）
5月21日（土曜日）	・首里城 https://oki-park.jp/shurijo/ ・木造建築見学
5月22日（日曜日）	・伝統的な民家住宅・中村家（国指定重要文化財、福木） https://www.nakamurahouse.jp/ ・漫湖マングローブ林見学 https://www.manko-mizudori.net/welcome/ecology/mangroves/ その後 那覇空港にて解散

* 移動はレンタカーを利用して乗合せとなります。

参加費 30,000 円

（宿泊費、朝食夕食、懇親会費、レンタカー費用）

* 昼食代は参加費に含まれておりません、各自でご負担ください。

* 直前のキャンセルについては、キャンセル料を請求させていただく場合がありますので、ご注意下さい。

定員20名

宿泊場所 ホテルルートイン那覇旭橋駅東 900-0021 沖縄県那覇市泉崎1-19-12

電話番号 098-860-8311

https://www.route-inn.co.jp/hotel_list/okinawa/index_hotel_id_64/

* 沖縄までの交通手段は各自で手配下さい。

https://booking.flypeach.com/jp/flight_search（ピーチ空港公式アドレス）

* 参加条件としてPCR等検査を受検下さい。

福岡空港に等におけるPCR等検査アドレス PCR検査 4,000 円 抗原検査 2,000 円

<https://covid-kensa.com/fukuoka-ap.html>

* 今後のコロナ感染状況次第では、実施を中止とすることもあります。

【参加申込書】メールかFAXでお申込みください。

【申し込み締め切り】令和4年5月6日までにお願いします（定員 20 名）

住 所	〒	
氏 名		
連絡先	電話番号	携帯番号
	メール	
備 考		

* 当日連絡が取れるように、携帯番号は必ずご記入下さい。

《連 絡 先》

熊本県 阿蘇郡 小国町 宮原 1802-1

小国町森林組合内事務局 担当:森林整備課 川谷 賢正

電話:0967-46-2411 FAX:0967-46-5474 携帯番号:090-2507-8360 メール:kawatani@ogunisugi.com